

分析および解説

「全体」

漢文らしい問題になった。昨年度のような問題を予想して泡を食った人も少なからずいたものと思われる。漢字の意味を見分ける問題や、基本的な助字の読みを組み合わせて選ぶ問題、書き下し文の問題、漢詩の韻の知識が必要となる問題などがある。内容の読解の問題も、漢文の知識との関連で問うものが二問で、独立して内容を問う問題は二問のみである。昨年度とはずいぶん様変わりした。試験制度に関するこまごまとしたことは、注をきちんと参照しないと分かりにくいかもしれない。ただし、文章全体の難易度はさほど高くないので落ち着いて読めば大丈夫。

「各問」

問1

漢字の意味を問う問題。以前は文中のある漢字Aと同じ意味のAを含む熟語として最も適当なものを選ばせる問題が出題されていた。本年は単に意味を表す熟語として最も適当なものを、文中の漢字とは関わりなく選ばせる問題になっている。傾向としては新しい。というよりも、以前の問題の方が手が込んでいて、本年度の問題は単純な問題だと言える。

(1) 正解は

「よくす」と読む。詩や賦を作ることが上手、得意であるという意味。内容的には正解はであるが、問題点が一つある。正解の「特技」は日本語としては動詞にならず、誤答が全て動詞的に用いることができることである。「絶賛」は褒めること、ただし自分ができることについては言わない。「博覧」「愛好」「多作」はいずれも詩についての関わりで正解とは少しずれる。

(2) 正解は

「にくみ」と読む。「疾」は他に「病気」の意味に用い、「疾病」「悪疾」などの熟語がある。「はやい」という意味もあり、「迅速」はその意味である。熟語は「疾走」「疾風」などがある。正解の「憎悪」は「憎」も「悪」も憎むという意味。「苦痛」「閉口」はずれている。

問2 正解は

(ア) (イ) いずれも二通りに読んで、それを組み合わせる。 (ア) は「つひに」とは読むが、「すでに」とは読まない。「つひに」と読む字は他に「遂」「終」「卒」などがある。(イ) は「すなはち」とは読むが、「なほ」とは読まない。「仍」は「なほ」と読む。「すなはち」と読む字には他に「則」「即」「便」「輒」などがある。「安」は「いづくんぞ」「いづくにか」「両方の読みがあるが、ここでは「いづくんぞ」「いづくんぞ」と読む字は他に「寧」「庸」「焉」などがあぬ。

問3

(1) 正解は

読みにいくつかポイントがある。「之」は「これ」と読んで、「銭明経」をさすこと。「使」は「しむ」と読む使役の助字であること。最後に「肯」は「あへて」と読む助字であること。

と。ただし、「不肯」は「がへんぜず」と読むことは可能で、
は「之を呼ぶも醒めしむるを肯んぜず」の「呼ぶも」が「呼びて」となって、「之を呼びて醒めしむるを肯んぜず」であれば正解。

(2) 正解は

答案を集める者が来るまで銭明経はぐっすり寝ていたわけである。いつも一番になる男が寝込んでいるのを他の受験生が起こすはずはあるまい。「肯」は自らの意志によって行うことを表す助字。同じく「あへて」と読む字に「敢」があるが、こちらの方は勇気をもつて行うというニュアンスがある。の誤答はそれを使ったもの。

問4 正解は

傍線部について尋ねるふりをしながら実はそれ以外のところをよく読む必要がある問題があったりするが、正直に前後の状況の説明という形になっていて好感が持てる。易しい。「時間がないので」だけで正解にたどり着いた受験生が多かったのではないか。「卒爾」は「あわてて、急に」という意味である。誤答には「仲間が起こしてくれなかったことにあきれたが」や、「自分以上の実力者はいないので」や、「解答用紙をとりもどすことはできないので」など、まことしやかとは言えない大きすぎる傷がある。

問5 正解は

韻の規則により、
か が正解であることは明か。ただし、その先はあまり易しくない。よく分からずに解答してたまたま正解の人と不正解の人に分かれただろう。「天柱」との対比に思い至れば正解に到達する。三・四句で「月や星をも下に見ることができるような、天を支える高い柱などはない」という趣旨のことを言っている。あるのはいくつかの（天柱に比べると低い）山ということになる。なお、七言詩なので、第一句も押韻することが多いが、この詩の場合は韻を踏んでいない。

問6 正解は

賦（長編を原則とする）が課題とされていたにもかかわらず、時間がないために七言絶句の作品となってしまった。そのことは選択肢全部に共通なので、解答のポイントとはならないが、この問題までたどり着いて気付いた受験生も少なからずいたと思われる。見分けるポイントは一つ。自分と日月との位置関係。「倒」の解釈にかかっている。「天を支える柱」なのだから、その上にいれば、太陽や星も自分より下に見ることができらるだろう。は「太陽や月を背にしながら」、
は「太陽や月がこの世の中を逆方向に」、
は「逆立ちしながら」、
は「太陽や月が人間界を走るのを見上げたい」が、いずれもおかしい。

問題文

吾郷ノ錢明経善^ニ詩賦^ヲ。毎歳督学ノ科歳^ニ試^ニ。古詩^ヲ、錢^ハ必^ズ冠軍^{タリ}。一歳題^ヲ為^リ天柱ノ賦^一。錢入^ルレ場^ニ時、飲^レ酒^ヲ過^キ多^キ竟^ニ大醉^シ、入^レル^ニ号^ニ輒^チ酣睡^ス。同^レ試^ヲ者疾^ニ其^レ每^ニ試居^ル、不肯^ハ呼^レ之^ヲ使^メ醒^メ。有^リ納卷^ノ者過^ニ其^レ旁^ヲ、乃^チ告^グ之^ニ。錢始^シ着^ク然^{タル}モ、已^ニ無^シレ及^フ矣。卒爾^ト問^ヒ題^ヲ、書^ス七言絶句一首^ヲ。詩^ニ云^フ

我来^ニ揚子江頭^ニ一望^{メバ}

一片^ノ白雲^ノ数点^ノ山

安^ク得^シ置^キ身^ヲ天柱^ノ頂^ニ

倒^シ看^ル日月^ノ走^ル人間^ヲ

学使得^テ卷^ヲ評^シ云^フ「此^ノ人胸中^ニ不^レ知^ラレ吞^ニ幾雲夢^ヲ」仍^リ取^ル

第二^ニ。(姚元之『竹葉亭雜記』による)

書き下し文

吾が郷の錢明経詩賦を善くす。毎歳督学の科歳に古詩を試みるに、錢は必ず冠軍たり。一歳題は天柱の賦為り。錢場に入る時、酒を飲むこと多きに過ぎ竟に大酔し、号に入るに輒ち酣酔す。試を同じくする者其の試毎に首に居るを疾み、肯へて之を呼びてさめしめず。納卷の者其の旁らを過ぐる有りて、乃ち之に告ぐ。錢始^覺然たるも、已に及ぶ無し。卒爾として題を問ひ、七言絶句一首を書す。詩に云ふ、

我揚子江の頭に来たりて望めば 一片の白雲数点の山

安くんぞ身を天柱の頂に置き倒に日月の人間を走るを看るを得ん

学使卷を得て、評して云ふ「此の人胸中に幾雲夢を呑むかを知らず。」と。仍りて第一に取る。

現代語訳

私の郷里の錢明経は詩賦が得意であった。毎年、督学が科詩や歳詩に古詩を試験問題としたところ、錢(明経)は必ず成績最上位であった。ある年、題は「天柱の賦」というものであった。錢(明経)は試験の会場に入るとき酒を飲み過ぎていてとうとう大いに酔っぱらってしまった、受験生用の個室に入るとすぐにぐっすり寝てしまった。一緒に試験を受けていた者は錢(明経)が試験でいつも第一位になるのを快く思っていなかったため、彼に声をかけて起こしてやるうという気にはならなかった。答案を回収する役人がそばを通りかかってや々と声をかけた。錢(明経)ははじめぼんやりしていたが、もはや時間が無くなっていった。あわてて題を聞くと七言絶句を一首書き記した。その詩に言う、

私が揚子江のほとりにやって来て遠くを望めば、ひとひらの白い雲といくつかの山があるだけだ。

どうして天柱の頂上に身を置いて、太陽や星が人間界を巡っている様を逆に上から眺めることなどできようか。

督学が答案を手に入れて、評して言うことには、「この人の胸中にはいったいいくつの雲夢があるかわからない(この人の胸の中には計り知れない壮大な着想がある。)」と。そこで錢(明経)を第一位とした。